

舞鶴幼稚園・早緑子供の園の歩み

井上 哲雄

はじめに

今日は舞鶴幼稚園と早緑子供の園という2つの園の歩みについてお話しするわけですが、今年2013(平成25)年、舞鶴幼稚園が創立100周年を迎え、記念誌を作るということで見直していた創立50年から10年ごとに作っていましたこれまでの記念誌と、早緑子供の園も創立30周年、50周年、60周年と3回記念誌を作っていますので、それらの記念誌を参考にして、掲載されている写真を紹介しながら舞鶴幼稚園と早緑子供の園という2つの園の歩みと西南学院大学との関わりについても触れて話していきたいと思います。

昨年、西南学院創立記念日の新聞一面広告の「ドージャー先生へのメッセージ」の中に私の長男の芳雄が書いていましたが、私の祖父は西南学院の中学校や専門学校に教師として勤務していて、また父は長い間、西南学院高等学校の教師をしていました。その後、私が西南学院大学に教員として勤めるようになり、そして私の子どもたちは舞鶴幼稚園や西南学院高校に行くという、そういう四代に渡る浅からぬ関わりが我が家にはありますので、この職員研修会で舞鶴幼稚園と早緑子供の園の歴史について、職員の皆さんに知っていただくようにお話しすることは、私がなくてはならない使命ではないかと思っています。今日は、たくさんの写真を記念誌からピックアップし、それを見ながら話をしたいと思いますので、よろしく願います。

最初に、舞鶴幼稚園は1913(大正2)年に荒戸、西公園の下に南部バプテスト宣教団の宣教師によって創設されました。その後、西公園から地行の浜辺に面したところに幼稚園が移って、戦争中にアメリカの宣教団はなかなか幼稚園を運営することができない時代になって福岡浸礼教会(現在の日本バプテスト連盟福岡基督教会)に運営してもらった時期がありました。そういうことがあって、その後1940(昭和15)年に西南保母学院という大学児童教育学科の前身の学校ができて、そしてそれが短大となり、4年制大学の児童教育学科になります。その附属幼稚園として舞鶴幼稚園ともう一つ第二附属の早緑幼稚園というのがあって、戦争前1941(昭和16)年から10年ぐ

らい経って戦後の1951(昭和26)年に統廃合され舞鶴幼稚園に一本化されました。鳥飼の校地の早緑幼稚園の中に終戦間近から早緑国児園という戦災や引き揚げで孤児になった子どもを預かるような働きを福永津義先生などが始めて、それが児童福祉法の保育所の制度ができて、1949(昭和24)年から早緑子供の園となっています。このような流れがあって、今は鳥飼校地に舞鶴幼稚園と早緑子供の園があることとなります。

Ⅰ 舞鶴幼稚園100年の歴史

1. 前 史

前史としては、舞鶴幼稚園ができる前に福岡で開始された南部バプテスト派の宣教活動が挙げられます。1901(明治34)年に福岡浸礼教会が開設されて、その後1906(明治39)年に西南学院の創立者のC.K. ドージャー先生たち宣教師が来日しました。余談ですが、古い資料を読んでいたら、この3組の宣教師夫妻は「泥棒3人組」と言われたそうです。「泥棒」というのは、ドージャー先生の「ド」で、「ロ」はロウ先生、それにボールデン先生の「ポー」で「ドロポー」。これで3人の名前が覚えられるということが書いてありました(笑)。ということで1907(明治40)年に福岡バプテスト神学校が開設されましたが、数年で横浜バプテスト神学校と合併統合して東京に移転してしまいました。その跡の校舎を利用して、1911(明治44)年に大名に福岡バプテスト夜学校という英語を教えながら聖書の福音を伝道するような活動が起こってきました。その一環で宣教団の婦人たちが日本の家庭婦人などを集めて西洋料理などを教えるなどいろいろな伝道活動をしている中で、幼児のためのキリスト教保育の場が求められていると感じ、それがきっかけとなって1913(大正2)年に舞鶴幼稚園が開設されることになりました。

2. 第1期：南部バプテスト宣教団による直接経営の時代

グレース H. ミルズという方が初代の園長で、1913年に福岡県に申請して翌年の2月に許可が下りました。開設当時の舞鶴幼稚園は、荒戸にあって西公園下の第2の鳥居の近くの民家を借りて保育を始めたわけです。舞鶴城の舞鶴をとって、舞鶴幼稚園という名前を付けたといわれています。このとき、C.K. ドージャー先生の長男エドウィン(後に園長もされました)も、最初からこの幼稚園に園児として通っていたことです。舞鶴幼稚園は「イエス様を多くの子どもたちに紹介すること」が一番大きな目的で建てられました。子どもたちにキリスト教を伝えることとその家庭に

も伝えるということをはっきりした目的として作られた幼稚園でした。それから8年ほど経って、当時の通称で地行四番町というところに幼稚園が移転しました。そこは、当時は博多湾に面した土地でした。現在では大規模な埋め立てがあって地行浜が造成され海辺から離れてしまっていますが、そこを手に入れて幼稚園や宣教師の住居などを作りました。

この写真（写真1）は西公園下の民家で幼稚園を始めた頃ですが、看板が立っていて左側に羽飾りの帽子を被った初代のミルズ園長が立っていますけれど、並んでいる子どもたちを見ると、男の子はなぜかみんな学生帽のような帽子を被っていますし、みんな羽織に袴を着ています。これはたぶん何かの行事のときだと思われますが、みんなこういう格好をして幼稚園に通っていたというそういう時代です。これは卒業式のあと記念写真を西公園の階段のところまでみんなで写っています。卒業証書をもっている卒園生と在園生も周りにいるという感じです（写真2）。そしてこれは部屋の中でこういう机を並べて、最初に幼稚園を作ったフレーベルの積み木、正確には「恩物」と言っていましたが、それを使って子どもたちといっしょにいろいろな活動をしているところです。奥の方にミルズ園長が写っています（写真3）。また、西公園に出かけて行って輪になってお遊戯をしている場面ですね（写真4）。地行に移った後、園舎と海との間には塀はなかったみたいで、そのまま浜辺に出かけていろいろな活動ができたようです。

今度、発行される『まいづる創立100年誌』の「保育の移り変わり」の中の記事で、この時期の海辺の幼稚園の様子を述べられた米多比先生の話を用いますと「戸外あそびの時間になると、皆、跳（はだし）になって、海岸に飛び出して行きました。空には、四季その日、その日の変わった雲の動きが見られましたし、波が白く、大きく、



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5

小さく。遠くの島々、炭坑の三角山が眺められ、漁船、ヨット、汽船、アメリカの軍艦と、海の上も時により賑やかになりました。殊に夏には地引網がかけられて、小父さん達の中に割り込んでの手伝い、引き寄せられた網の中の魚を驚異の目をもって眺め、こぼれた小魚を、大事に大事に、持って帰ったり、貝がら拾いや、天日製塩場の見学、豚小屋の子豚達の成育振りなど、こうした海辺のあそびの中からは、工作や、ごっこ遊びその発展が繰り返され、書き出せば、切りがない位の楽しい自由保育が展開されて行ったものでした。」という海辺の幼稚園だったそうです。それからこれは室内での卒園式の様子ですが、中ほどに第4代園長のフルジウム先生がいますが、5年余り園長をされていた先生で、音楽家で福岡市内のホールで音楽会を開いたり、グリークラブの創設に中心的に関わった先生です(写真5)。この先生は日本人の医師と結婚されたということです。「フルジウム」という先生のお名前は「フルガム」という読み方もあって、ロバート・フルガムという人が1989(平成元)年のベストセラーで『人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ』という本を書いています。

そのロバート・フルガムはフルジウム先生の親戚に当たるということを聞きました。クリスマスのページェントも羊飼いや博士など衣装を着てやっていました。これは1928年のボールデン夫人が園長の時の写真です（写真6）。



写真6

3. 第2期：福岡浸礼教会への委託管理の時期

それから世界大恐慌が起ってきてアメリカのミッションボードからの援助が難しくなり、なかなか期待できなくなったというようなこともあって、一時期、1933(昭和8)年から1940(昭和15)年の8年あまりですが、福岡に最初にできた福岡浸礼教会、今の日本バプテスト連盟福岡基督教会に幼稚園の運営をお願いするということもありました。その教会の下瀬加守牧師が園長を兼ねて、私の祖母の



写真7

井上トクが教会の婦人会で役員をしていましたので、舞鶴幼稚園にも関わったということがあります。これがその証拠の写真ですけれども、この左の和服姿の当時50歳に近い井上トクが下瀬園長とともに写っています（写真7）。私の祖母は、広島女学院の保育関係の学科を卒業していて、明治時代でしたので、アメリカ人宣教師の先生が授業も英語で行い、指導案も英語で作られたということでした。そのノートを捨てずに保管していたら、広島女学院が100周年を迎えたときに当時の授業のノートということで、祖母のノートがそのまま記念誌に掲載されたこともあります。

それからその頃のクリスマスの写真には、「かもめの水兵さん」ではないですが、水兵姿で敬礼した子どもの姿が写されています。部屋には万国旗や「Merry Christmas」の文字があるようなそういうクリスマスでした（写真8）。地行の園舎の庭には、このような大きな滑り台があって、この左に見える洋館が宣教師館です（写真省略）。当時は（巡回）児童伝道者と呼ばれる人が来て、園児たちに聖書のお話をしてくれていたようで、この写真では真ん前に座っているのは下瀬園長で、回りの園児たちが聞いているのは、旧約聖書のくじらのおなかの中にいるヨナのお話ですね（写真9）。



写真8



写真9

4. 第3期：保母養成機関への付託管理の時代

次に第3期。この時期は日本国中がかなり戦争に傾いていて、アメリカが敵国視されたため、宣教師が居づらくなって国内から追放され帰国せざるを得ない事態に陥りました。そのような中で1940(昭和15)年に「西南保母学院」が設立されます。保母学院は下瀬牧師が院長となり、その目的としては「幼稚園や託児所の保母を養成するに留まらず、真のキリスト者を養成して主の奉仕をなしえる婦人を社会に送り出すこと」が掲げられていました。教会で働く牧師を助けながら、教会附属の幼稚園で保育を行うことができるような女性(牧師夫人か牧師の助け手)を育てるといふかなり大きな課題でした。その時、C.K. ドージャー先生の夫人である M.B. ドージャー先生が、神戸から福永津義先生を招いて、西南保母学院の保育科主任として福岡に来てもらうこととなります。福永先生は、その後20年間、保母学院やその後、福岡専攻学校や短大に発展して行った教育現場で働かれ、幼児教育や保母養成の中心となって、「おばあちゃん先生」と呼ばれ舞鶴幼稚園、早緑幼稚園、早緑子供の園の園長もされて、がんばった先生です。この先生については、影響力が強いのですが、あとでエピソードを紹介したいと思います。福永先生が来られた翌年に鳥飼に土地を手に入れて、今の樋井川に沿った(現在舞鶴幼稚園、早緑子供の園、鳥飼バプテスト教会がある)鳥飼校地に移って、そこで第二附属幼稚園の早緑幼稚園を作ります。やがて戦争がますます激しくなる中、1944(昭和19)年に西南保母学院から「福岡保育専攻学校」に校名を変えて、終戦間際の1945(昭和20)年には、早緑子供の園の前身である「早緑国児園」という施設ができます。これはその頃の写真で、鳥飼の西南保母学院の前で撮った早緑幼稚園第2回の卒園式の記念写真です。その横に早緑幼稚園の看板も見ることができます(写真10)。1947(昭和22)年舞鶴幼稚園は第33回の卒園式をやはり鳥飼の福岡



写真10



写真11

保育専攻学校の前で集まって行っています。早緑幼稚園の第8回の戦後の卒園式ですね。先生方は和服を着ていて福永先生も和服が中心だったということです（写真11）。

5. 第4期：学校法人西南学院の組織内への移行の時代

第4期として、戦後、日本に平和がよみがえって、そして教育の中でも民主的な改革などが起こってきます。福岡保育専攻学校も西南学院の中の「短期大学部児童教育科」というふう組織替えて、舞鶴幼稚園と早緑子供の園も学院組織の中に組み込まれていきます。しかし実質はと言いますと、短大の児童教育科は大学神学部と同じく、日本バプテスト連盟によるキリスト教の指導者や奉仕者を育てるという目的のもとに「神学部・児童教育科評議員会」が運営しており、他の学部とは違っていました。ですから同じ学院の中でも別扱いされていて、予算を管理する部署が違っていたようです。この時代の園長は福永津義先生ですが、その娘の高橋さやか先生が舞鶴幼稚園の主事に就任して、戦後のこの時期から舞鶴幼稚園の保育の中身を独自のカリキュラムとして編成していきました。それから1951(昭和26)年にミセス・ファーナーという以前日本に宣教に来られたことのある南部バプテストの婦人が基金を出されて、西南学院に用途をまかされ委託されたときに、W.M.ギャロット先生のお勧めもあり、その基金を舞鶴幼稚園の建替えに充てて、新しくきれいな園舎の建物が建ち、「ファーナー・ハウス」と呼ばれました。

さて話は変わり福永先生のことを少し話しますと、福永先生は、父親が伝道者で徳永規矩と言い、『逆境の恩寵』という本の著者であり、熊本英学校を作った大変有名な方でした。この福永津義先生は長崎の活水女学院で幼児教育の勉強をして、その後、福井の教会立幼稚園で働き、牧師の方と結婚されて、その後神戸に移り早緑幼稚園を建て経営していました。1940(昭和15)年に西南保姆学院を設立するときに（たぶん福

岡浸礼教会の下瀬牧師がご存知で推薦されたのではと推測するのですが)、福永先生にキリスト教の幼児教育者の養成を使命とした新しい学校を作るためにぜひ来てほしいということ、M.B. ドージャー先生が何度も手紙でお願いして、やっと福岡に来られました。福永先生は、園児の親に対してもイエス様の話など伝道されていて、そして親たちが「みのり会」という集まりを作って、それを基に鳥飼バプテスト教会が1956(昭和31)年に設立されました。1950年代に私の弟が舞鶴幼稚園に通い出した頃、私も日曜日に弟を送り迎えして行って、ジャングルジムや滑り台で遊んでいたときに、着物を着たおばあちゃんが出てきて「教会学校があるから来なさい」と言われて、わけもわからず連れて行かれたことがありました。着物を着たおばあちゃんは、福永先生だったのです。母の会などで福永先生からいろいろ話をお聞きして、私の母が非常に感化を受けてクリスチャンになったこともあり、私も中学校ぐらいから鳥飼バプテスト教会に通うようになりました。福永先生に関するおもしろい話で、私の母は「自分こそは福永先生に特別に大切にされている」と思っていて、そのことを同じ母親同士でのおしゃべりの中で話したら、他のお母さんも「自分こそは福永先生の一番弟子で、先生は自分のことを一番大切に思ってくれているのだと信じている」と言い出し、みんな「我こそは特別に気にかけてもらっている」と思い込んでいたことが明らかになって驚いたという話を聞いたことがあります(笑)。福永先生が書かれた『愛母通信』などいくつかの本の中に、福永先生は3人姉妹で、事情があって子どもたちを長崎の活水女学校の寄宿舎に入れて、お母さんが熊本で仕事をしていて離れて暮らしていたときのこと、手紙を書いたり、季節ごとに服や本などいろいろな物を送ったりしていました。そのときに、一人ひとりの子どもに応じて違ったものを送っていて、一人の子どもについてこの子はどうだからというようなことが手紙に書かれていて、一人ひとりの良さや持ち味をきちんと分かっている、気を配って違った物を送っていたということでした。そういう一人ひとりを大切にしている心が、お母さんから福永先生に伝わっているからこそ、先生の影響力が強かったのだと思います。

1960(昭和35)年に福永先生が定年退職されて、その後、E.B. ドージャー先生が園長に就任されました。1963(昭和38)年に舞鶴幼稚園は創立50周年を迎えます。この年、集中豪雨のため樋井川が氾濫して、舞鶴幼稚園も早緑子供の園も床上浸水してしまったことがあります。これはそのときの浸水被害の様子で、布団など濡れたものを全部出して乾かしているところです(写真12)。また同じ1963年に短大児童教育科は鳥飼から西新校地に移転して、今の本館があるあたりに古い中学校の旧校舎があってそこに移ることになります。これはその時代の写真で分かりにくいのですがファー

マー・ハウスと言う文字が右の方に見えます。「西南短大附属舞鶴幼稚園」という看板もありますね(写真13)。次の写真(省略)は鳥飼教会の方から北の方を見た構図です。柵の中に草花が植えてあったり、池もあったようです。そしてこれは尾崎恵子先生がその頃の園舎を描いた略図ですが、西鉄から市内電車をもらってきて園庭においてあり、人形の家が2つもあって、また北の方には「一麦寮」という女子寮が鳥飼校地にありました(写真と図省略)。次は電車の中から職員が顔を出している記念写真で、一番右側が福永先生で、一番左側が尾崎先生です(写真14)。これは木で作った手押し車がはやっていたころの写真です(写真15)。昔はビール箱が木製でそれをもらってきて車輪をくっつけたり、持つところを作ったりしてできたお手製の手押し車は子どもたちに大人気で夢中になって乗って遊んでいました。それからこの写真では、舞鶴幼稚園創立の時に5歳で園児として園に通っていたE.B. ドージャー先生が園長になってクリスマスのキャンドルサービスをしています(写真16)。



写真12



写真13



写真14



写真15



写真16

6. 第5期：50周年以降60周年まで

それから創立50周年の後、村上寅次先生が短大部長に就任して、舞鶴幼稚園や早緑子供の園の園長をされ、公開保育などを行ったことや、福永先生やE. B. ドージャー先生が相次いで1960年代の終わりのころ亡くなられたというようなことがありました。1971(昭和46)年に新しい園舎に建て替えて、尾崎先生の「太陽と木と小鳥」というモザイクをあしらったモダンな園舎になりました。その頃から子どもたちの夏休みの合宿が始まります。舞鶴幼稚園の合宿は、他の幼稚園が1泊2日で合宿を終るところを2泊3日と長く、それだけに負担が大きいのですが、引率の先生ががんばっていました。合宿では、寝る前にきちんとお祈りをします。それから、お昼にはスイカを食べたり、けっこうはだかん坊で過ごしますが暑い真夏の合宿ですから大丈夫です。合宿で阿蘇に行くようになってから、園の先生だけではなくて卒園生で高校生やボランティアの大学生などが参加していました。それから園庭に巨大な土管をおいたり、アスレチック風の大きな木の株を植えたりして、子どもたちが楽しく遊べるようになっています。当時はジャングルジムやブランコとかもありましたね。今の舞鶴幼稚園はブランコなどの固定の遊具はなるべく置かないようにしています。この写真では右側の方が職員室とホールがあってその奥に保育室があって、その奥に一麦寮が見えていました。こっちの左端は人形の家とか、鳥飼バプテスト教会が見えています(写真17)。創立60周年を1973(昭和48)年に迎えて、記念写真を撮っています。そのとき「ひかりの子らの音楽会」という記念行事には、舞鶴幼稚園の卒園生で安永徹さんと順子さんという姉弟で有名な音楽家として活躍されている演奏家たちも参加しています。(写真18)



写真17



写真18

7. 第6期：60周年以降70周年まで

そして創立60周年から70周年にかけての間に児童教育科は短大から4年制大学に変わって、舞鶴幼稚園の園長は児童教育学科の教授会の推薦を経て、理事会で承認される方式をとり決定されるようになりました。また主任は、現場の職員の中から選ぶ形になっています。園では障がいを持つ子どもも受け入れて他の健常な子どもたちといっしょに生活するという「統合保育」にかなり前から取り組んでいました。その中のひとりである自閉症で就学猶予にしてもらい1年長く4年間通園し、舞鶴幼稚園を卒園して小学校に行ったおさんがいました。その記録を『りゅうじ君と共に』という冊子にして1975(昭和50)年に出版しています。その他、学年の枠を取っ払って「たてわり保育」という保育をこの時期にはじめて取り組みました。それまで園長には大学の役職者が兼任する場合も多かったのですが、1977(昭和52)年尾崎恵子先生が就任されています。また主任には安武智里先生が選出され、1977年から30年余り主任を務められて、園の保育のリーダーとしてがんばっておられました。それから園の保護者をつなぐ『まいづる』という機関誌が以前は毎月発行されていたのですが、それが「100号記念特集」というのを1978(昭和53)年に発行して、その後、1983(昭和58)年から『季刊まいづる』となり、年に4回と発行回数が減りました。それで、もうその頃は毎週「クラスだより」を学年ごとに発行しているので、月刊の『まいづる』は必要がなくなったからでした。この時期と次の時期あたりは、尾崎先生と上野武先生が交代で園長をされています。園に寄贈された電車に子どもたちに絵を描いてもらうというようなことも1978年ぐらいにしました。これは下書きをしている写真(省略)で、出来上がったのはこういう楽しい動物園の絵が描かれた電車になり園庭に据えられていました(写真19)。それから、竹馬にも取り組んでいて、5月の日曜日の父親参観

の日に参観に来たお父さんと子どもたちがいっしょに竹馬を作って、それで練習して秋の運動会のときに披露しています。また年中の子どももお泊りをして、園舎に1泊するというようなことも1981(昭和56)年ころから始めて今でも行っています。お泊りのときは舞鶴公園まで散歩に行って、そこで遊んで、近くの銭湯にみんなで入浴しに行って、園にもどってきてカレーの夕食を食べ、ゆうべのお楽しみの後、保育のお部屋で寝ましたが、最近は銭湯もなくなって入浴はなくなりました。またピアノの伴奏にあわせて体の動きをいろんな動物の動き、這ったり、片足で鶴のように立ったり、体を反らせたりするような「さくら・さくらんぼ保育園」で実践されていたリズム運動も取り入れました。これは私が大学院生のときボランティアとして年長のキャンプに阿蘇までついていったとき、村上先生と上野先生でいっしょに撮った1975年頃の写真ですが、髪が長いのが私です(写真20)。髭がないからすっきりして、違って見えるかもしれないですね。大学院生の頃に手伝いに行っていてクリスマスも参加しました。どうしたわけか私も顔を出して職員といっしょに記念写真を撮りました(写真21)。一番右側が藤野登志子先生という当時の主任で、中央に村上先生や尾崎先生がいらっやいます。



写真19



写真20



写真21

8. 第7期：70周年以降80周年まで

1985(昭和60)年に私も西南学院大学に赴任して子どもたちも園児として通うようになり、前にも増して舞鶴幼稚園との関わりができるようになりました。この時期から「ゆたか学園」という知的障がい児の通園施設との交流などがあります。それからミニ講演会を始めました。園で行っている保育を分かりやすく親に説明して、教師たちががんばって取り組んでいるそれぞれの保育活動が、どんな意味で大切なのかを分かってもらえるように努めています。またこの頃から「ひかりの子文庫」という子どもの絵本を貸出しするような文庫を作っています。これは母の会がバザーなどでお金を集めて、よい絵本をたくさん揃えてくれたおかげで、貸出しできるようになりました。尾崎先生と上野先生が交代していた時期から、1991(平成3)年に磯望園長に交代して、磯先生は、アンケートなど研究的なことも取り入れられました。その中で従来キリスト教教育の要として、日曜日を登園日にして、教会学校という形で礼拝を中心とした保育を行っていましたが、小中学校の週休二日制が始まり、親の希望もあって、日曜日の代わりに土曜日を登園日に変えることや、土曜日にも休みになり月曜日に礼拝を持つようになりました。日曜日に登園していた頃の卒園生は、隣の鳥飼バプテスト教会にその続きのような形で、毎週、日曜学校に来ていましたが、それもこれ以来だいぶん減ってきましたね。これは卒園前にひかり組の子どもたちが雑巾縫いをしたりしている写真(省略)で、この写真はゆたか学園の子どもたちと泥んこ遊びをしたりする交流で、舞鶴幼稚園とゆたか学園は相互に行き来していました(写真22)。これは私の長女の沙耶香ですが、沙耶香も3年間、舞鶴幼稚園に通いました。私も父親参加の会の役員をしていたので、法被(はっぴ)を着て踊っています(写真23)。



写真22



写真23

9. 第8期：80周年以降90周年まで

1994(平成6)年から私が舞鶴幼稚園の園長に就任しました。この時期、幼稚園と保育園のあり方を検討するという政府の動きに合わせて、西南でも幼保一元化を目指すということで、院長が両園長を兼任して各園に副園長を置くことになり、私が副園長になったこともあります。また、2002(平成14)年には、築30年あまりになった園舎を新しく建て替えなければならぬという問題が出てきます。園長になって私は光組の合宿にはギターを持って行き、キャンプファイヤーのときに伴奏をしました。それからこの写真は、一麦寮の跡地で、駐車場になる前は畑にしていたり、駐車場になったらその回りに畑を作ったりして、野菜などを子どもたちが収穫しています(写真24)。



写真24

10. 第9期：90周年以降100周年を迎える

この10年は、「どんどこクラブ」という預かり保育が始まって、2005(平成17)年に深谷潤園長に代わりました。主任も30年間務められた安武先生から2007(平成19)年に横田哲子先生に代わりました。その時期に本学の『人間科学論集』に児童教育学科の先生が中心になって、それまでの活動をまとめたものがあります。もともと舞鶴幼稚園は母の会の活動が活発なのがいいところなのですが、近頃、お母さん方の負担が大きいということで、それを少しでも軽減するためにバザーを廃止し、餅つき大会を縮小して保育の中で行うようにしています。その他、現在は舞鶴幼稚園の100周年に向けて記念誌の作成や、久しぶりにカリキュラムを全面的に改訂し作成し直したりしています。将来の課題がいくつかありますが、とくに問題なのは幼稚園希望の児童数が減って保育園の希望者が増えているために、園児数の獲得が難しくなっていることで当面の重要な課題といえます。そして新しい子ども・子育て支援システムに関する法律ができて、「認定子ども園」という保育園と幼稚園の両方を合わせたようなやり方が出てきました。今までの舞鶴幼稚園と早緑子供園のそれぞれ歴史があって、なかなかすなりといっしょに一元化された保育・教育の実現が困難な実情です。両園を含めて学院全体でいろいろ話し合ったり、検討していくようなことも必要で、これも課題の一つになっています。

100周年の記念誌に掲載するグラビアの写真で園や子どもたちの様子です。これが今の新しい園舎です（写真25）。2階建てにして運動場が広く取れるようになっています。外のほうから見るとアルミで、無機質な感じで工場みたいに見える可不評の声が聞かれたこともありましたが、これはメンテナンスに手がかけられないメリットがあり、実際の保育室や廊下などの内部は無垢の木がふんだんに使われていて子どもに優しい園舎ができています。



写真25

II 早緑子供の園64年の歩み

それでは早緑子供の園の歩みについて、（残された時間が短くなって申し訳ないですが、）話していきたいと思います。

1. 国児園時代（1945(昭和20)年～1947(昭和23)年）

1945(昭和20)年9月の福永先生のときに福岡保育専攻学校校舎の一部で「早緑国児園」という施設を開設し、引き揚げ孤児5名や戦災孤児4名、また、家庭で世話ができない要救護家庭児3名（昼夜）などを集め保育を始めましたが、1947(昭和22)年10月に廃止し、1948(昭和23)年には普通の保育園と同じように、働く母親の子どもを預かるというようになっています。



写真26

これは最初の頃の写真ですが、当時は幼い乳児たちをこんなベッドで寝かせています（写真26）。

2. 児童福祉法による認可をうけ発足(1) 前期（1949(昭和24)年～1955(昭和30)年）

早緑子供の園は、1949(昭和24)年6月より児童福祉法による認可を受けて発足しました。一時期、早緑幼稚園を全部保育園の形態に変えて、園長福永津義、主事堀江喜



写真27



写真28

与、乳児部前田末子他のスタッフで、定員幼児100名、乳児10名と定員が多いときもありました。1951(昭和26)年に福岡保育専攻学校が短大になり、西南学院の法人組織に入りました。福永津義園長、中川ノブ主任となり、定員は幼児25名、乳児10名に落ち着きました。早緑子供の園も西南学院が経営する保育所となりましたが、そのころ社会福祉法人が保育所を運営するのが一般的で、学校法人が運営するということは例外的で非常にまれな運営形態だったようです。戦後しばらくは食糧難があって、みんなひもじい思いをしていたのですが、アメリカからのララ物資などの救援物資やユニセフからの援助により給食などで園児たちの昼食を賄っていました。この早緑子供の園の園長は、ほとんど舞鶴幼稚園の園長と兼任でしたが、主任に中川先生が関わられていて、1954(昭和29)年に定員を60人に増員し、内訳を幼児40人、乳児20人としています。乳児3人に1人の保育士を雇うことが必要で経営上の負担になっていました。

この時期は、経済的に大変困窮した家庭(日雇い労働者、母子家庭)の子どもが入園することが多くて、保育料が全額免除などの場合もかなり多かったです。早緑子供の園はこの写真のように平屋の1階建てで、舞鶴幼稚園との間に木製の低い柵がありました(写真27)。その中で、児童教育学科の実習生と遊んだりして、この時期、園で夕方お風呂に入って家に帰るというような生活がありました。乳幼児を連れて近くによく散歩に出かけたりして、樋井川に七夕の笹飾りを流しに行った写真(省略)がこれで、こちらの写真はひな祭りの記念写真で、この左側に膝をついているのが中川先生で、その一番後ろに福永先生が立っていらっしゃいます(写真28)。

3. 児童福祉法による認可をうけ発足(2) 後期(1956(昭和31)年~1962(昭和37)年)

1950年代、短大卒業生を保母に採用し、経験豊かな保母たち(永野キクなど)と協力しながら、キリスト教保育の実践が進められ、地域における保育の指導的役割を果たしていきました。児童教育学科との関わりや支援により優れた保育を続け、1952

(昭和27)年には福岡県指定保育所（モデル保育所）に指定され、1954(昭和29)年の全国保育事業大会で優秀保育所表彰を受けるなどして、認められてきました。研修会や保育事業大会で給食や保育などいろいろなテーマで研究発表しています。

福永先生が、1960(昭和35)年に定年退職で辞められて、その次にE.B. ドージャー先生の夫人の M.E. ドージャー先生や村上寅次先生が園長を務められ、そのあと中川先生が1976(昭和51)年から1987(昭和62)年までの10年余り園長を務められました。昭和30年代後半になって、保育事情の変化が見られ、西新町に保育所もでき、措置児も夫婦共働き家庭が増加してきました。

4. 短大、西南学院校地への移転（1963(昭和38)年～1971(昭和46)年まで）

1963(昭和38)年6月には（舞鶴幼稚園といっしょで）集中豪雨で園舎への浸水がありました。それからお月見会は園庭でウサギのお面を被ったりして夕方からお月見会を行いました。1963年10月短大が西新校地に移った時期は、1964(昭和39)年から村上寅次先生が短期大学部長に就任、舞鶴幼稚園、早緑子供の園両園の園長を兼任するようになり、その頃より次第に入園児、特に（生後2、3ヶ月児からの）乳児保育の希望者が増えてきました。そのころの話題としては1969(昭和44)年に福岡市で虫歯の調査があり、虫歯のない子どもが97%もいた優秀保育所ということで表彰され、西日本新聞に載ったこともあります。また園舎が足りなくなり、1971(昭和36)年には大学から使わなくなったプレハブを譲り受けて、プレハブ園舎として付け足したりして年長の子どもの部屋に使っていました。クリスマスもホールでページェントを行ったりしています（写真29）。中村弘先生が園長をされていた時期もありました。秋の感謝祭のときは家から大根やいろんな野菜を持って来て神さまに感謝をしています。1970(昭和45)年には干隈にあった西南学院「山の家」での年長児合宿もしていました。



写真29

5. 園舎改築より30周年まで（1972(昭和47)年～1979(昭和54)年)

1973(昭和48)年12月に舞鶴幼稚園よりやや遅れて新園舎が完成して、そのコンクリート造りの1階建てで屋根の上に平和のシンボルの白い鳩の像がのっていました。他方、大学では1974(昭和49)年短大児童教育科から4年制児童教育学科への移行がなされました。その後1976(昭和51)年に園長に中川先生が就任され、水町祐子先生が初代主任保育になりました。中川先生はその前の1951(昭和26)年



写真30

より主任をされていて、早緑子供の園の中心になって運営に当たっていました。園の写真の中には子ゾウさんがやってきて、赤ちゃんを乗せたりしたイベントの写真もあります(写真30)。夏のプールの前にはスイカ割りなどもしています。卒園式の時には、桜を植えました。この左の方に森山真規子先生が写っていますが、後に主任を随分長くされていましたね(写真省略)。1978(昭和53)年には第1回なつまつりを実施しました。1979(昭和54)年には創立30周年記念式典を開催し、記念誌『早緑子供の園30年のあゆみ-あいされるこども』を発行しました。

6. 30周年から40周年ごろまで（1980(昭和55)年～1991(平成3)年)

創立30周年から50周年までの間に少し変わってきています。1987(昭和62)年3月に中川先生が定年で辞められて、私井上が4年間、園長を務めたのですが、それまで父母の会は、働いている父親、母親だから父母の会で時間を取るのはあまり良くないのではないかという理由で中川先生が積極的ではなかったのですが、考え方が変わって父母の会を作りたいという希望が多く、9月に父母の会を発足しました。また1991(平成3)年2月から父母の会主催のパザーが始まりました。しかし父母研修会は、すでに1983(昭和58)年からだいたい年1回もたれていて、その第1回は「クリスマスの手作りおもちゃ」についての研修で、それ以後「両親教育」という形で継続されています。1986(昭和61)年にはバプテスト保育連盟研修会で「未満児の生活習慣」の発表もしています。

1987年に皆上敬子先生が主任保育士として就任されました。保育士たちの熱心な提案により、1988(昭和63)年4月からハンガリーの作曲家コダーイが作った「わらべ歌」を利用した保育の方法(コダーイ方式)を早緑子供の園の保育の中に取り入れて

実践しつつ、勉強会やいろいろな機会に発表したりするなど、早緑子供の園の保育の柱の一つになっています。「わらべ歌」は、子どもと1対1で、歌にあわせて働きかけるような触れ合い遊びから、集団の中でいろんなことばや動きのかけあいをする遊びなど古くから伝わっている伝統的な遊びを含んでいます。この「わらべ歌」のコーデイ方式には、保育の中での乳幼児の発達やニーズに合わせて環境の整え方もいろいろ工夫することも特徴の一つといえます。1990(平成2)年から「わらべうたの研修」をもち、11月にはコーデイ芸術研究所(福岡)の乳児部会で公開保育実施し、その後1993(平成3)年より同研究所(東京)の渡辺幸子氏を迎え公開保育や勉強会を開催、1997(平成9)年以降、ハンガリーの心理学者セチュイ・ヘルミナ氏を講師に年1回の保育の観察会、勉強会をもつなど研修を積み重ねてきました。

7. 40周年ごろから50周年まで(1991(平成3)年～1999(平成11)年)

私の後、1991(平成3)年7月から堺太郎先生が2年ほど園長をされていたときに、1991年9月27日の台風19号のために年長児のプレハブの屋根が風で飛ばされたことがありました(写真31)。それから1992(平成4)年8月(仮園舎解体後)新園舎が竣工し、1993(平成5)年園長は中村和夫先生に代わりました。

その後、1997(平成9)年7月には園長・副園長制に変わり、L.K.シート園長、坂口りつ子副園長に交代しました。保育や食育の専門の立場から坂口先生が副園長として活躍されました。1998(平成10)年に厚生省は公式に「保母」から「保育士」へ名称を変更しました。それまで60人だった定員は、1998(平成10)年から30人増やして90人になり、かなり大きな保育園になりました。現在は110人ぐらい在園しています。定員の90人プラス10%から15%を受け入れないと、福岡市内の待機児童が解消されないというやむをえない事情で乳幼児数が多くなっています。特に早緑子供の園の保育は評判が高く、わが子を入園させたいという親の希望者が他の園より多いと聞いています。1999(平成11)年には早緑子供の園創立50周年を迎え記念式を開催しました。

これは、私が園長だった時代の今宿の野外活動センターに行ったときの写真で、右側の青年は当時本学の学生で山下順一郎君といい、鳥飼バプテスト教会でいっしょだったので、今は西南学院小学



写真31



写真32



写真33



写真34

校の先生としてがんばっています（写真32）。それから、これはクリスマスのときの写真ですが、ここに舞鶴幼稚園の先生が保護者の中に数人混じっています（写真33）。私が園長をしていた頃は、舞鶴の先生のお子さんが早緑子供の園に入っており、足立慶子先生、横田哲子先生、谷口幸枝先生などが父母の立場で関わっていました。舞鶴幼稚園と早緑子供の園が仲良くなれる機会ではあったんですけども、今も舞鶴幼稚園の先生2人が早緑子供の園にお子さんを預けていらっしゃいます。これは園児が学院の院長室を訪問したときの写真で、早緑子供の園、舞鶴幼稚園も年長の子どもたちが年に1回、学院の院長室を訪問しています（写真34）。

8. 50周年から60周年まで（2000（平成12）年～2009（平成21）年）

その後、2000（平成12）年に村坂政利先生に園長が交代し、2002（平成14）年10月には、園舎全面改築で早緑子供の園の園舎が新しくなりました（写真35）。これがホームページにある新しい園舎の写真で、2階建てになっていて、1階は主に乳児のための部屋で、年中や年長の部屋は2階になっています。このような新しい園舎で、気持ちよく保育が行われ、園児たちも元気に成長しています（写真36）。



写真35



写真36

2003(平成15)年4月から、公募によって岡村純子先生が園長に就任されますが、この体制はあまり長く続かなかったようです。2003年5月からは地域支援(交流)活動として「保育園で遊ぼう会」を開始しています。それから2005(平成17)年には、保育雑誌『キリスト教保育』に乳幼児保育の実践「0・1・2歳児～関わる～」を掲載しました。2005年6月から卒園生対象の「小中学生の集い」を開始しました。2006(平成18)年からは、舞鶴幼稚園との合同でのキリスト教保育の一環として、花の日礼拝、感謝祭礼拝をいっしょに開始するようになりました。

2007(平成19)年4月には、寺園喜基園長、門田理世副園長(2008(平成20)年6月まで)に交代し、門田副園長の指導のもと、保育に関することをいろいろ勉強しながら実践して行くという姿勢が早緑子供の園の中にありました。2009(平成21)年に創立60周年を迎え、記念式典を挙行し、『早緑子供の園60年のあゆみ—ひかりのこども』を発行しました。2010(平成22)年4月には寺園喜基園長の後、和佐野健吾園長(小学校校長との兼任)が就任されています。

最後に

両園の100周年と64年の歩みを紹介しましたが、それぞれ保育のねらいというのは両園に共通しているところがあって、「ひかりの子」というのを大事にしています。早緑子供の園の『60年のあゆみ』の保育内容の紹介で、早緑は総主題として「愛と信頼、感謝と希望の生活」ということで、早緑子供の園が目指す子ども像、「ひかりのこども」これは「神に愛されている子どもとして、人に愛され、人を愛し、奉仕する喜びを知り、感謝と希望を持って生きる子ども」のような子ども像で、「心も体も健康な子ども」「自発性のある子ども」「ものごとに感動できる子ども」「想像力の豊か

な子ども」「人と協力し、思いやりのある子ども」というようなことを目指しています。

舞鶴幼稚園の保育の目標を入園の時の資料で見ると、舞鶴幼稚園も「ひかりの子」を目指して「神に愛される子として喜びと感謝を持って人を愛し、平和を作り出す子どもを目指す」というようなことで、舞鶴幼稚園は、4つの保育の柱を挙げていて、1つは「キリスト教保育」ということで「神に愛されている自分を知って、人をも愛し、大切に、命の大切さを知る」。2つ目は「のびのび保育」で「明るくのびのび自分のやりたいことを思いっきりやる」。どろんこ遊びやそういうこともやりながら心と体を育てる。3つ目は「統合保育」ということで、「一人ひとり違ったところのある子ども、それぞれの良さや苦手なところも分かって、お互いに助け合って思いやりを持って育てる」。最後に「たてわり保育」が舞鶴幼稚園の柱となっています。この舞鶴幼稚園と早緑子供の園は鳥飼校地にあり、西新や百道浜の大学、中高、小学校と離れているので、同じ西南学院の1つとしてなかなか理解してもらえないところがあるかもしれません。しかし同じ西南学院のファミリーの一員としてこれからも、ご理解いただき、ご支援いただきますようによろしく願います。

今日は、写真がたくさんあったので、写真の説明のような感じになってしまいましたけれど、ご質問のある方はどうぞ手を挙げてください。分かる範囲でお答えしたいと思います。

〈質 疑〉

宗教部事務室の篠田です。貴重な写真とお話をありがとうございました。舞鶴幼稚園の礼拝からはじまった鳥飼バプテスト教会ですけれども、舞鶴幼稚園、早緑子供の園と鳥飼バプテスト教会の関係をもう少し伺えればと思います。

〈応 答〉

一応、組織的には鳥飼バプテスト教会と西南学院は、別組織ですが、その誕生の経過があって、両園では保育の上でのキリスト教のバックボーンとして、鳥飼バプテスト教会の牧師先生に、子どもに対して聖話をしてもらっています。舞鶴幼稚園の場合は、父母礼拝という毎週金曜日に1時間足らずの時間ですが、保護者とともに礼拝を守る時間を持っていて、園長、学院の宗教主事のハンキンス先生、鳥飼バプテスト教会の牧師先生の3人で交替しながら話すようなことも行っています。そういう中でキリスト教の話や子育てに関する話などをしてもらったりしています。また子どもたち

も1学期に1回ほど教会の礼拝堂に入って、そこで牧師先生の話の聞いたりしています。早緑子供の園も同じように牧師先生に来ていただいて話をしてもらったり、教会訪問の機会も年に何回かクラスで持っていたりしています。また、感謝祭の日に果物を持っていったり、花の日に花を持っていったりしています。舞鶴幼稚園の場合、卒園式の前の日曜日の卒業礼拝で、鳥飼バプテスト教会の教会学校の小学生たちが牧師先生といっしょに教会学校の誘いに来たりしています。それから公式ではないのですが、今、韓国のキリスト教会関係の宣教師の人が、鳥飼バプテスト教会でハングル講座をやっていて、そこに舞鶴幼稚園や早緑子供の園のお母さん方が何人か参加しています。そのほか鳥飼バプテスト教会でAP、Active Parentingという講習会もやっていて、教会で特別な催しがあるときはチラシなどを両園でも配っています。

質問には直接関係していませんが、少し言い残したことを追加させてください。舞鶴幼稚園では、子どもにいい体験をこの幼児期に豊かに経験させるために親も園といっしょにがんばって取り組む行事を計画し実施してきましたのですが、その行事が多くなると親にとっても負担が大きくなるという声も聞かれるので少しずつ減らしてきています。しかし家庭や親が子育てを全部幼稚園や保育園に任せるというのでは将来困ることになるので、いっしょに何が大事か考えてやっていこうということになっています。それで、多少は負担を軽減していくけれども、基本的なところは大切にしつつ今の時代に合わせて、どうすればいっしょにできるのかということを考えて取り組もうとしています。ということで、スクールバスがなかったり、給食がなかったり、保育時間が短いという声に対して、延長保育を始めたり、「ちびっこ」と呼ぶ3歳未満児が週1回、幼稚園に親子で来て遊ぶような取り組みを始めています。いろいろ家族の変化や今の親のニーズと子どもの発達を考えて、子どものためにいい体験を園と家庭が協力して与えていくことの重要性をわかってもらえるかが課題として大きいと思います。それから、早緑子供の園でも地域での子育て支援が保育園の課題として求められてきて、幅広く地域の子どもたちに保育園で遊ぶという機会を定期的に提供したり、地域に開かれた子育てセンターとしての役割などについても、いろんな活動が増えているという現状があります。政府の動きの中で幼稚園と保育所を一元化する「子ども、子育て支援新システム」についても検討する必要があります。幼稚園は短い時間に、先生たちが十分に計画をして、子どもにとってワクワクするようなそういう凝縮した体験をさせたいと思い、張り切って準備し取り組んできましたが、それを1日中続けるとなると、なかなか難しい。2時過ぎに幼稚園の保育が終わったとしても、先生たちは6時ぐらいまで翌日の保育の計画を話し合ったりしています。それに対し

て、保育園は子どもの生活がまず第一で、子どもがゆっくりして無理のない生活を過ごすことを重視してきました。しかしながら、「子ども、子育て支援新システム」では、保育園でも3歳以上の幼児には幼稚園と同じ内容の質の高い幼児教育をきちんとしなければならない時代になりました。そのような中で、保育園は子どもを保育するだけでなく、家庭の問題を含めて地域に関わる子育ての問題、家族全体をサポートするような役割が増えてきています。そこで舞鶴幼稚園と早緑子供の園は同じことを目指しているけれども、少しずつ今までの歴史的経緯と保育に関する考え方に違いがあって、そうした問題点を検討しながら、すり合わせるのにもう少し時間がかかりそうだと思います。ちょっととまどいませんでしたけれども、現在の両園の課題も付け加えさせていただきました。

[2013(平成25)年8月20日(火):西南学院事務局職員夏期修養会、熊本市・菊南温泉ユウベルホテルにて]